
ネトゲの女

沢村つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネトゲの女

【Nコード】

N0669M

【作者名】

沢村つかさ

【あらすじ】

ネトゲプレイヤーで元キャバ嬢、現クラブ経営者。

そんな彼女が日々ネットでリアルで日常を送っていく。

そんな半分手実に基づいたお話。ネトゲという言葉が分かる人は楽しめる？かと思います。

分からない人には少し楽しみにくいかもしれません。

ガールズラブというカテは入れてますが過激な表現はありません。

私（梶本ツバサ）と同居人シャルロットやネトゲ仲間との日常をお楽しみください。

日常のヒトコマ（前書き）

ネトゲという言葉が分かる人は楽しめる？かと思っています。

分からない人には少し楽しみにくいかもしれません。

ガールズラブというカテは入れてますが過激な表現はありません。

私（梶本ツバサ）と同居人（シャルロット）やネトゲ仲間との日常をお楽しみください。

日常の「ト」マ

「ごめ、ちょ離席」カタタつとチャットを打ち込む。

「あいあい」「いてらー」等、ネット世界からリアクションが返っているようだが全て見る間もなくディスプレイの電源だけを切る。

ちょうどダンジョンを回り終えたところで助かった。
でなければ戦闘パーティに穴を空けることになるからだ。

リアル世界では仕事用の携帯がサイドテーブルでやかましい音を立てている。

時刻は23時。夜の街はまだ活気にあふれていることだろう。
それゆえに、ちとイヤな予感がする。

「何？トラブル？」

「あ、梶本さん。すみません今電話大丈夫ですか？」

「大丈夫だから出でんだけど？」

「すみません。実は常連の石上さんなんですが、どうしても梶本さんに店に出て欲しいみたいで・・・」

「やだよ、もう遅いし」

「そこ、何とかありませんかねえ。出てくれたらボトル入れるのもやぶさかでないと思うもので・・・」

あのオヤジもう少し羽振り良ければ愛想してあげてもいいんだけどね

「そのボトル、鏡月だったら怒るからね」

「出てもらえるんですか？！」

「どうせもう私のレクサスこっちに寄越してるんでしょ？」

「バレてましたか」

ってことはあと10分もないか。メイクだけ適当に見れるようにして髪と服はあっちで何とかしよう

「バレバレ。どうせシヨウ君でしょ？彼、運転ヘタっぴだからあんまり私の触らせないでよね」

「すみません、彼くらいしか手が空かなくて」

「今日、入ってるんだ？」

「ええ、それはもう。金曜日ですから」

「髪やれる子いるよね？着いたらすぐ出来るようにしておいて。あと服は私のストックから1着出しといて」

「はい、大丈夫です」

「色、カブらないの出しなさいよ？」

「承知してます！」

「店、入ってるんだったらあなたもボーイの真似事くらいしておきなさい」

「はい、ではお待ちしてます」

クラブオーナーにしていまだ半現役。

先代からのご指名で何だかんだとこの歳まで（断じて30は越えていない）この業界の人。

たまに我侭な古参の客の要請でもない限り店には出ず、普段は事務処理や経営指南。

お気楽な暮らしではある。

そのお陰で割と暇な時間を得た私はネットゲームに興じていた。最初は割りと軽いモノからだったが。

今やっているのはいわゆるMMORPGというヤツだ。いい歳こいてファンタジーもないと思うかもしれないがコレがなかなか面白い。

服飾スキルを磨いて着飾ったり、ネット上で募ったプレイヤーで協力してデカイドラゴンを倒したり。生活に冒険に戦闘にと、まさにファンタジー世界の箱庭。

あ、今日店出た分を日払いにして帰りにWEBマネー買って新しく実装されたガチャ少しやろう・・・

適当に（どうせ薄暗い店内なので細部までは見えはしない）メイクを整え、勤怠表に目を通す。

金曜だというのに中々ナメた出勤率である。もう少し『女の子』を増やすべきか少し悩むところではある。

そうこうしているうちに迎えの車が到着する。

「どれ、ひと稼ぎするか」

誰に言うでもなくひとりごちて上着を引っ掛けて玄関を出た。

影武者シャルロット（前書き）

もう一人の主人公？シャルロットが登場します。

影武者シャルロット

バタバタと出かける音にもぞりとヘッドフォンを外す。

今週はたくさん働いたからたまには金曜でも休んでいいかと休んでいた午後11時。

部屋の戸を開けて「ツバサあ？」と問いかけるも応答ナシ。

へんじがないただのおでかけのようだ。

「ウヘヘ」

文字にするとそんな笑みを浮かべ、ツバサの部屋へ向かう。
もちろん住人が不在なのは承知の上だ。

カチャリと小さな音を立てて目当ての戸を開ける。

ふわりとツバサ愛用の香水、レンピカの甘い香りがする。

電気は消えているもののフォーンと低いPCのファンの音が聞こえる。

勝手知ったる他人の部屋。

電気を点灯させると、次いで2つのディスプレイの電源をONにする。よほど慌てて出かけたのか画面にロックはかかっていない。もちろんネットゲにもログインしたままである。

メインのディスプレイには愛らしいキャラクターがちゃんと仲間と思しきキャラクターと座っている。

チャットログを見るに、ちょうどダンジョン回りがひと段落したところのようで次の狩場を決めているようだった。

「ただいまー」

しれっとチャットを打ち込む。

「おかー」だの「早www」など早速反応が返ってくる。

ネット上の『ツバサ』が帰ってきたことから、頭数が揃ったのか先程よりも高難易度のダンジョンに行くようだ。

パーティは5人、全員同じギルドに属している顔馴染みだ。

「Here we GO!」わざと英文のチャットを入れる。

顔馴染みの面々からは「ちょww入れ替わってるww」「これツバサさんじゃねえww」「シャルちゃんこんばんw」などリアクションが返ってくる。

そう、私達はたまに入れ替わるのだ。

正確には私がツバサの隙を突いてキャラを乗っ取っているだけなのだが。

運営会社の規約的には違反らしい（1キャラを複数人で使うこと）のだがこればかりは証明する手段がないので処罰のしようがないだろう。ちなみに違反だと知ったのは入れ替わりを始めてから1年以上経ってからでそれまでも誰にも指摘されたこともなかった（笑）

地道なトレーニングや謎解きが得意でリアルタイムの戦闘やタイミングを合わせるミニゲーム等が苦手なツバサと正反対の『シャルちゃん』それが私だ。

仲間内では暗黙の了解というか、誰もその入れ替わりを咎める者はいない。

むしろ戦闘時は戦力アップでラッキーくらいのノリだ。

そんな訳で今夜はちょっとばかりファンタジーの世界でひと暴れしてやろうと「ニヤ」と笑う。

私はシャルロット。

一応、生まれも育ちも生粋のフランス人。日本語はそれなりに達者であると思うが仕事の時はあえてカタコトにすることもある（その方が可愛いらしい）

縁あって梶本ツバサと一緒に暮らす事になり、ツバサがオーナーのクラブで適度に働いて適度に怠けた日本ライフを楽しんでいる。

どっという経緯でツバサと出会ったかはまた別のお話で。

日常のヒトコマ？

午前2時。

1時には店仕舞いを始めたハズが勤怠管理や業務態度の注意など、真面目にオーナー業をこなしていたらいつの間にかこんな時間になっってしまった。

帰る頃には空は明るくなっているだろう。

『店長』君と戸締りをして店を後にする。

ちやっかり日払い扱いにした本日の出勤分の4千円をなんの迷いもなく全てコンビニでWEBマネーに変換する。

「これでガチャ新実装の衣装ゲットだぜッ」

小声で無駄な気合を入れてみた。

待たせてあるレクサスに乗り込み、シヨウ君に自腹で買った缶コーヒーを渡す「お疲れさま、宜しくね」

シヨウ君はこれから私を送り届けてからレクサスを月極駐車場に戻し、帰宅しなければならない。可愛そうに。

いや、私のせいなのだが（笑）

すこしウトウトしたところで我が城に帰宅。

城と言っても古い旅館を改装した社員寮も兼ねるボロ家である。

いや、風情がある。ということにしておこう。

玄関を開け、階段を上ると、早めに戻っていた女の子達がシャワー上がりで「お疲れ様です」と通り過ぎてゆく。

さて、まだネットの住人達は活動しているだろうか？
さすがにもう寝落ちしてるかなーと思いながら自室に戻る。

と、そこでシャルロットが寝落ちしていた。

私のPCの前で、涎垂らして・・・

画面の中のキャラクターも満身創痍、装備もボロボロといった感じ。
チャットログを見るに相当ハードな所を周回したようだ。

おかげさまでそれなりにキャラは成長しているようだ・・・

他の面々も時間が時間だけにその場で寝落ちしてる者やログアウト
してしまっているメンツもいるようだ。

一応チャットで声をかけてみるが、リアクションはない。

能天気な寝顔のフランス人を尻目に風呂へ行くことにした。

あとで蹴り起こしてやろうと心に決めて。

遅れたアバン（前書き）

登場人物や物語の背景を少し整理しておこうと思います。
普通最初にやるべきことですよねwすみません。

遅れたアバン

風呂上り。

適当なメイクの後処理をして、くしゃくしゃの髪の毛を戻す。

旅館時代のものをそのまま改装時に残した庭の見える縁側で寛ぐ。

元旅館のカウンターとロビーは各々の私物やら共用の冷蔵庫などあったり、普通の家の居間の様相となっている。

そこから持ち出した濃紺の缶とその辺に落ちてた（多分置いてあっただけ）ガスライター。

小さめの缶を開けるとふわりと柔らかい『Peace』の香りがする。

チヨイとキツめだが煙草はこれに限るのだ。

フィルターなぞ無いので吸い口側を少し押し潰して浅く啜える。

点火、スツと一口目の芳香が広がる。

この瞬間が私の『平和』であり、その象徴でもある時間だった。

点火に使ったライターをよく見るとSILVERMATCHと刻印がある。

「フランス製か・・・」

確か、フランスのメーカーの品だったハズだ。

記憶が正しければattitudeという品。

商売上、ここに入出入りする誰もがライターを持っている。

自分で喫煙に使わずとも仕事で必ず必要なアイテムであり、ちょっとした話題も提供してくれる重要な小道具でもある。

はて、これは誰のライターだろうか。

重厚なシルバーは使い込まれた擦り傷が年季を物語っている。ブラックのドット模様が特徴的である。

いや、よく見るとブラックではなくカーボン調のようである。

「・・・あ、アレのか」

私の部屋で寝コケていたシャルロットのだ。

また、そのへんに置き忘れて出店間際になって騒ぐのだ。

このモデルのライターの愛用者は数人いたハズだがカーボン調にカスタムして使うのはアレくらいのものだ。

ちなみに私はガスライターだとガス残量が分かり難いのでタンク式のオイルライターを愛用している。本日は急な出店だったので自室に置き忘れてしまったのだ。

この旅館改社員寮には二十数名ほどが生活している訳だがそれが全て『女の子』ではない。中には子連れ、という者もいるし。

その子だけが暮らしており母親はアフターに忙しくほとんど不在という者もいる。

皆、気心知れた仲間であると同時にライバル。

時に新人が来たり、結婚や転職で出て行く者もいる。

ちなみに私は自宅という一軒家を持っていたりする。

ほとんど暮らさなかったし、今でもほとんどコッチで生活している。でまるでモデルハウスのようになっている。

と、いうのも私が任されているクラブは私の旦那のモノだったのだ。それが2年前病気であっさり逝って以来、私が引き継いでいる。

旦那はここらではちよいと名の通った旧家の一人息子だったので、義父にクラブの権利は返す予定だったのだが・・・どういう訳かこなくなってしまった。義父、つまりはグループ企業を束ねる社長様な

のだがどうにも私を気に入ったらしく息子に任せていた分は君に任せると言われ、現在に至る。

旦那と出会ったのは夜の街ではない。

夜の峠のPAだった。

旦那の愛車は初期型のロードスター。

私の愛車は赤のカプチーノ。どちらもオープンカー

元来、クルマ好きであった私にはそのロードスターが古い型でありながら愛され手を尽くして整備されているのが分かった。
自分のカプチーノなどは当時訳あって無職だったので金がなかった
為ボロボロであった（苦笑）

「峠で幽霊が出るそうなんですよ」
その時の旦那は言った。

「はあ」
新手のナンパ？とも思ったがそういう風でもない

「下りでシルビアやらランエボを抜き去る赤いカプチーノがいるそうなんです、ドライバーが乗ってないんだそうですよ」
旦那は続けた。

「・・・」

・・・それ、私か？（身に覚えはあったが）

「あなたですよ？赤いカプチーノの幽霊さんって」
旦那は幽霊の正体見たり枯れ尾花とでもいうような表情だった。

私は、身長が小さかったのだ。
それで恐らく抜き去られる一瞬ではドライバー不在のように見えた
のだろうというのが旦那の言い分だった。

「お手合わせ願えませんか？」

「下りで？」

「勿論。」

「そのロードスターで？」

「勿論。」

「イジつてあるみたいだけど勝てる訳ないよ」

「どうして？」

「自分で言っただじゃないシルビアやランエボすら抜き去ったって」

「たかだか1600ccのロードスターじゃ勝てない？」

「理論的に考えてそうでしょ？もう時間も遅いし帰るわ」

「じゃあこうしましょう」

そう言つて旦那は私に札束を渡した。

100万円のである。

「・・・え？」

「お手合わせ頂けて私にあなたに勝てなかったらそれをそのままも
つて帰つて下さつて結構です」

悩みどころである。無職で金欠に100万円はデカすぎた。

「いいわ、じゃあもし私が負けたら？」

金の力は偉大である。

「私の経営するクラブで働いてください」

「それってキャバクラ？」

「そうとも言います。どっちに転んでも損はないと思いますが？」

旦那は人の良さそうな笑顔で賭けレースを持ちかけた。

.....

結果、私は参加賞として1万円と名刺を貰った。

「では午後4時にお待ちしてます」

旦那は涼しい顔でそう言っただけで幌を開けてオープンで朝焼けの街へ帰って行った。

梶本ツバサ。23歳の夏、なんだか良く分からないまま就職先と旦那様を得ることになった。いわゆる一目惚れな訳だが。

それから私はクラブで働くようになり、旦那と結婚する。

結婚してから現役で店には出ていた。

2年前までは。

新婚気分もさめやらぬうちに旦那は倒れそのまま数日後逝ってしまった。

「後の事は頼む」

それだけ言い残して。

形見と言えるのはあのロードスターくらいのもだった。

旦那が逝ってから、私はまた峠に通うようになった。

ある日明け方まで走って帰り道、繁華街を通るとスニーカーを力ラカラ引きずりながら明らかに拳動不審な外国人を見つけた。

なんでこんな時間にこんな場所に？

「Can I help you?」

声をかけて振り向いたその姿を見て驚いた。

まるでお人形さん。淡いブルーの瞳にサラッサラの金髪。整った顔立ちは本当に同じ人類かというほどであった。

「あ。すみません。タクシーとか見つからなくて困ってたんです」

モロ日本語でした。
とても流暢な。

「こんな時間じゃ見つからないよ、とりあえず乗りなよ」

「いいの？ありがと！」

「で、どこに行きたかった訳？」

「この地図のここにある、向川旅館に行きたかったのだけど」

「えーと・・・」

「・・・？」

その地図は相当古いようですよ外人さん・・・

その旅館は今、私達の社員寮です・・・てか私の住処です。

事情を説明し、空き部屋にとりあえずゲストとして泊まってもらうことにした。

日本にあこがれ、日本各地を行き当たりばつたりな感じで旅してきたこの元気な外人さんともい「シャルロット」の旅はこの旅館改め社員寮で終わりを告げた。

一応、経営責任者になっていた私は彼女を雇用する手続きをし母国の家族に自分達が面倒を見る旨を伝え。彼女は私達と暮らすことになった。社長様、もとい大旦那様もシャルロットが気に入ったらしく色々面倒な手続きには手を貸してくれた。

「ツバサぁ大好きッ！」

日本に住むのが夢であった彼女はそれを叶えてくれた私が大層お気に入りのようである。

お店の方でも外見の美しさも去ることながら日本語が達者だったこともありすぐに人気者になった。

こうして私は従業員一同と拾ってきたフランス人と同居しながら経営者をしつつネットゲにハマっていた。

三本目のピースをもみ消し、自室へ向かう。

くだんのフランス人を蹴り起こしに行くためである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0669m/>

ネットゲの女

2010年10月10日01時24分発行